



「浦和のさかえに 歴史をほこる」開校155周年 YEAR を迎えて

大いちょう

令和 7年10月31日
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 令和7年度 No. 7 048 (829) 2737

「想像力（創造力）のエンジン」を働かせて

校長 永山 誉

本校の校歌に「浦和のさかえに歴史をほこる われらの高砂小学校」という一節があります。本校の歴史の重さを感じる一節ですが、いよいよ来週の土曜日に、開校155周年記念式典と記念音楽会が、市長、教育長をはじめ来賓の方々をお招きし、さいたま市文化センターにて行われます。子どもたちも、素敵なお一日となりますよう準備を進めてきました。当日は、各御家庭お一人の入場となりますが、どうぞよろしく願いいたします。

さて、明日から11月。霜月を迎えるにあたり、秋の深まりを感じるようになってきました。秋と言えば、「食欲の秋」「スポーツの秋」「芸術の秋」「読書の秋」……。それぞれが、それぞれの秋を楽しむ季節です。このような季節、秋の夜長に御家族そろって読書でもいかがでしょうか。

ところで、読書と言えば、子どもの本離れが言われて久しくなりますが、今年も高砂小学校では、11月11日～28日の間、秋の読書月間として、図書委員会を中心に様々な取組が行われます。昨年度は、ブックランチ（給食とコラボ）、本の読み聞かせ（低学年）、シークレット本の貸し出し（高学年）、読書ビンゴなどが行われました。さて、今年は何の企画が計画されているのでしょうか。第79回目を迎える全国読書週間（10月27日～11月9日）の標語は、「こころとあたまの、深呼吸。」です。この標語の作者である「磯辺 菜々」さんは、

「めまぐるしい日常に息が詰まるとき、私は本を開きます。心が震え、ため息をつく。ハッと気がつき、息をのむ。ひと息ついて、まためくる。そうしてこころとあたまに酸素が満ちたら、どこまでも遠くへ泳いでいける気がします。」

と言っています。読書は、子どもたちの心情や感性を豊かなものにすると言われますが、本に慣れ親しんでいない子どもたちにとっては、読書をしようと言ってもなかなか本に手が届かないものです。そのような子どもたちにとっても、秋の読書月間をきっかけとして、新たな本に手を伸ばして「こころとあたまの、深呼吸」をしてほしいものです。

だいぶ前の話ですが、あるシンポジウムで、日曜日の夕方日本テレビで放映されている「笑点」でも活躍中の「林家たい平」師匠が話されていたことから、読書に関して感じたことがありましたので御紹介します。

「林家たい平」師匠は、落語を聞くことによって「想像力のエンジン」を働かせてほしいと言われていました。現在の世の中、携帯電話の普及やインターネットの発達により、私たちの周りには情報や映像があふれ、何も考えなくても様々なことが目に飛び込んできています。また、映像や画像を見ながら人は考えているようで、実は考えていないことが多いのではないのでしょうか。その点、落語は、言葉と仕草から、それぞれが、それぞれなりに想像力を働かせて聞かないと頭に入ってこないものである。このような世の中だからこそ、落語を聞いて「想像力のエンジン」を働かせてほしいという内容のことをお話されました。

この話を伺いながら、このことは読書にも共通するものであると感じました。「林家たい平」師匠は、「想像力のエンジン」と言われましたが、その「ソウゾウリョク」とは、イメージする「想像」とクリエイトする「創造」の両者を話されていたのかもしれませんが、読書も同じことが言えそうです。本は、言葉と文章の世界です。それだけに、「想像力」を働かせないと本の世界には入れないものです。また、本は、想像するだけでなく、そのことから新たな内容を創造することもできます。子どもたちの心情や感性を豊かなものにするには、それぞれが、それぞれなりに「想像力のエンジン」を働かせて本の内容を解釈し、そこから新たな「創造力のエンジン」を働かせて、新しいものを作り出して欲しいと思います。そして、言葉の乱れが懸念されている現在の世の中だからこそ、読書を通して、言葉を大切にする態度も培っていききたいものです。